大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所報［地球研ニュース］

Humanity & Nature Newsletter

no. 8

1 June 2007

目次

巻頭対談——02
地球研を触媒作用で光を放つ場に！
総合地球環境学研究所所長｜立本成文
同副所長｜秋道智彌

●特集—1
研究プロジェクトより——04
森は海の恋人か？—巨大魚付林の立証と保全にむけて—
アムール・オホーツクプロジェクト｜白岩孝行

●特集—2
研究プロジェクトより——06
列島に人間と自然の共存の歴史を求める
列島プロジェクト｜湯本貴和

●特集—3
新しい研究プロジェクト決定——08
第7回プロジェクト評価委員会により
新しい研究プロジェクト決定
プログラム主幹｜佐藤洋一郎
2007年度本研究［プレリサーチ］紹介
2007年度予備研究［フィージビリティ・スタディ］紹介

地球研だより——10
日髙所長退任記念講演会/第17回市民セミナー/人事異動/
招へい外国人研究者

出版物紹介——11
『ヒマラヤと地球温暖化—消えゆく氷河』/『人はなぜ花を愛でるのか』

お知らせ——12
第6回地球研フォーラム「地球環境問題としての『食』」/
第2回国際シンポ「緑のアジア」/地球研叢書・地球研ライブラリー/
上賀茂だより

巻頭対談

地球研を触媒作用で光を放つ場に！

立本成文［総合地球環境学研究所所長］
秋道智彌［総合地球環境学研究所副所長］

秋道　このたびの地球研の所長ご就任おめでとうございます。

立本　ありがとうございます。

秋道　どういうご心境でしょうか。

立本　日高前所長が研究所の基礎をつくられて、これから花を咲かせるという非常に大切な時期に、このような大任を負うことになりました。一生懸命がんばろうと思っています。

研究だけでなく社会的提言を

秋道　先生はこれまで地球研の評価委員長として、研究所の活動をきびしい目でご覧になっていたわけですが、今度は攻守ところを変えて、評価される側になられましたね。

立本　そうなのです。評価委員長のときには、これはいかん、あれはいかんと地球研に対してうるさいことを言ってきましたが、今度は逆にうるさいことを言われる立場になった。こういうのを運命の皮肉というのでしょうね。(笑)。

秋道　先生は、社会学、文化人類学から、東南アジアの地域研究へと進まれ、京大の東南アジア研究センター（現在の東南アジア研究所）の所長もつとめられましたが、この総合地球環境学研究所の今後の運営方針をどう考えておられますか。

立本　これまで私は東南アジアの地域研究を、自然環境を人間社会がどう利用し改変してきたか、全体像を捉えるという「社会文化生態力学」という方法で総合的に研究してきたつもりですので、その関心を少し地球全体に広げるだけで、私自身の基本的な研究姿勢は変らないと思います。ただし、組織としての地球研は、地球環境問題そのものの本質を解明する研究だけではなく、それをもとにした人間と自然とのあり方を新たにデザインして、社会に向けて提示するという仕事に取り組んでいかなければいけない、と思っています。

秋道　デザインですか。

立本　はい。私は地球環境研究は、状況の解明やモニタリングだけでは不十分で、未来の人類のためにどうすればいいのかを提言する積極的な設計科学であるべきだと思っているのです。

秋道　研究者は普通、解明から先をやりたがらないのが普通ですが。

立本　地球研にいる研究者はそれではだめだと思うのです。現時点で考え抜いた最高のソリューションを、そして状況が変ったり、新たな現象の解明ができたら、その時点でまた最高のソリューションを、というように不断に設計、構築していくべきだと思っています。

新しい英文名を考えよう

秋道　総合地球環境学研究所という名称については、どう思っておられますか。

立本　地球環境科学と言わずに地球環境学としたのは、卓見だと思います。自然科学の方法論だけでなく、人文·社会の学問も総動員して地球環境の研究を行うのだということを表わしています。総合というのは、各学問の総合という意味もあるし、現象を総体としてとらえようという姿勢が出ていますから、それも良いと思います。それより、地球研の英文名のほうが、少し誤解を招くかもしれませんね。

秋道　Research Institute for Humanity and Nature のどこが問題ですか。

立本　Humanity and Nature だと、人間と自然を二項対立的に捉える、科学的なイメージが強いような気がするのです。本当は、人間も自然の一部で、その人間が人間以外の自然とのあいだで、相互作用を持って問題を引き起こしているわけで、「自然のなかの人間」という基本的な立場をもっと明確にすべきではないか、と思っています。

秋道　どういう英文名がふさわしいとお考えですか。

立本　というより、研究所の英語名称に見合った「地球環境学」の訳の方が必要でしょうね。実は私も考え始めたばかりで、答えはまだみつからないのです。そういう問題提起をして、所員の皆さんと一緒に考えていきたいと思っているところです。

コンシリエンスという総合化を

秋道　相互作用を総合的に捉える方法については、どういうふうにお考えですか。

立本　各学問の方法論でばらばらにやったものを、ばらばらのままひとつの器に入れたような総花的なものを総合と呼んだり、それを無理にでももっと「統合」しないといけないなどと言う人が多いのですが、私はそういうふうに無理に括るのではなくて、各学問の方法論で、ばらばらに掘り進んでいったら、深いところでつながっていたというようなまとまり方での総合化が大事なのではないかな、と思っています。

立本成文

エドワード・ウィルソン（Edward O. Wilson：米国の生態学者）が使った「コンシリエンスconsilience」という概念なのですが、そんな形の総合化が地球研にはふさわしいのではないか、と思っています。

秋道　地球研はいろいろな学問領域の研究者がそれぞれの方法論でやっていて、ばらばらじゃないか、と外の人たちから見られがちでした。そうじゃないと言いたくて、それをどうやって統合するのかということがこれまでずっと課題だったのですが、先生が今言われたことは、改めて地球研に新しい息吹を吹き込む大きなきっかけになると思います。

■ 地球研の任期制について ■

秋道　地球研の研究者６年任期制については、前所長の日高先生も気にしておられたのですが、先生はどう思われますか。

立本　実は僕は、前の研究所で任期制をつくったのです。研究成果を全然出さない人が、じっとしていてもそれですごせるようなシステムでは困ると思い、5年ごとの評価で、4段階評価の「D」になった場合には１年の猶予の間に次の職を探しますという念書を全員に書いてもらって評価をするようにした。今度は逆に全員に任期がついている研究所の任期制が問題だというわけで、任期制を壊す立場にまわることが期待されている、これはもうひとつの運命の皮肉ですね（笑）。しかし、実は任期制というのは作るのは大変ですが、運用の仕方によっては非常によいシステムなので、全部壊す必要はないと思っています。ただし、地球研が研究所としての設立理念を守り、アイデンティティを存続していくためにはコアメンバーが必要です。コアメンバーのいない研究所というのは単なる寄り合い所帯で、うまく機能しないと思います。コアとなって研究所に長期的におられる人を、何らかの方法でつくる必要があると思います。それは全体の３割ぐらいだろうと私は思っています。

秋道　大胆かつ意味深長なご発言だと思います。

■ 研究者のありかた「一座建立」 ■

秋道　研究者にはどういうことを望まれますか。

立本　お茶で、「一座建立」という言葉があります。戦国時代でも、お茶席ではみな刀を捨てて、そこの座に座って、一つの和の世界を作りました。まして、ここはひとつの目的をもった研究所です。この研究所という「場」に、いがみあったりしないで、お互いに利他の気持ちで、研究者一人ひとりが光を発するような触媒作用を持たせたいのです。この上賀茂の自然も、この建物も触媒になりうるし、研究者も仲間を燃焼させ輝かせる触媒となろう、というわけです。そうすれば、規模は小さくても世界一の研究所になりますよ。５年間この研究所にいたことが、その研究者の誇りになるような、そういう伝説の研究所にしたいですね。

秋道　研究者自身の生きざまというか心構えも大事ですね

立本　最近はとくに生きざまと自分のしている学問のスタイルの一致ということが非常に気になっています。

秋道　そうですね。地球研では無意味な会議はなるべくやめるか短くして、本当のコミュニケーションの場を多くしないといけないですね。

立本　いままでもなされていたようですが、インフォーマルで、実質的なコミュニケーションの機会をもっと増やしていきましょう。

秋道　新所長とのコミュニケーションの場をみんな望んでいます。

立本　内部のコミュニケーションも大切ですが、社会に対する情報発信も大事です。その前に、これまでやってきた研究プロジェクトの成果をもとに、情報発信に値する社会的な提言を構築することが必要だと思います。

秋道　そうですね。先生に先頭に立っていただいて、この「地球研ニュース」で、そういう情報発信をやっていきましょう。

秋道智彌

2007.4.10
地球研 所長室にて
［撮影：二村春臣］

研究プロジェクトより

特集 1

森は海の恋人か?——巨大魚付林の立証と保全にむけて

北東アジアの人間活動が北太平洋の生物生産に与える影響評価

[通称:アムール・オホーツク プロジェクト]

白岩孝行

沿岸域の豊かな水産資源は、上流に位置する流域の森林が豊かであってこそはじめて維持されるという考えが日本には古来よりありました。沿岸域の生態系を支えている上流域の森林を「うおつきりん(魚付林あるいは魚附林)」と呼び、時の為政者が率先して保護してきた歴史が我が国にはあります。近年では、この思想に立脚して、漁民自身が上流域の森林を保護し、自分たちの生活の糧である沿岸の生態系を守ろうという社会運動が盛り上がりました。『森が消えれば海も死ぬ』(松永勝彦著)や『森は海の恋人』(畠山重篤著)、あるいは『森はすべて魚つき林』(柳沼武彦著)などの先駆的な著作によって広く普及した考えです。

日本は世界の中でも抜きん出て水産資源に依存している国であることはよく知られています。日本が利用する海域は多岐にわたりますが、中でも親潮やオホーツク海と呼ばれる高緯度地域の海域は、きわめて生産性の高い海域です。サンマやイワシといった浮魚と呼ばれる大量に漁獲できる魚の供給地であることはもちろん、浮魚を餌とするマグロなどの大型魚を間接的に養っているという点で、これらの海域は日本にとって死活的に重要な海域です。

従来、親潮域が豊かである理由は、寒流の親潮と暖流の黒潮がこの海域で衝突し、このため深層から大量の栄養塩が表層に運ばれ、春になって光の条件が良くなると、この豊富な栄養塩を使って植物プランクトンが大量発生するため、と考えられてきました。ところが、近年の海洋学の進歩により、植物プランクトンの増殖には、栄養塩や光といった条件のほかに微量な鉄が必要なことがわかってきました。

鉄は地殻を構成する主要な元素であるため、陸地ではたいへんありふれた元素です。ただし、鉄は水に溶けにくい性質を有しており、海洋の鉄の濃度はきわめて微量で、植物プランクトン

写真/上—
アムール川中流域の景観

に利用されてすぐに枯渇してしまいます。このため、鉄が豊富な陸地から常に供給されねばなりません。アラスカとカムチャツカ半島に挟まれた北洋や、南極の周囲の南氷洋は、鉄が枯渇しているために、栄養塩を植物プランクトンが使いきれずにいる海域です。

親潮域やオホーツク海は、幸いなことに全ての栄養塩が使い尽くされています。これは一方で、植物プランクトンの生育に見合うだけの鉄が常に供給されているからなのですが、この鉄はどこから来るのでしょうか。まず最初に思い浮かぶのは、大気を通じて飛んでくる黄砂です。アジアの沙漠に起源をもつ黄砂には約3.5％の重量比で鉄が含まれています。陸地に降ってくる黄砂は海にも同じように降りますので、ひとつの重要な供給源と考えられてきました。しかし、黄砂でもたらされる鉄の多くは酸素と結びついた粒子状の鉄なので、海水に入ってもそれだけでは植物プランクトンが利用することはできません。

長年にわたる親潮域における海洋観測から、これらの海域では表面ではなく、深度500m～1,000mといった中層に高い濃度の鉄が存在することが知られていました。我々のプロジェクトでは、これに目をつけ、ロシアの船を傭船することによって、2006年にこの中層の鉄の起源を遡っていったところ、それは親潮からオホーツク海へと至り、更にはオホーツク海へと流入する大河アムール川へと追跡できることがわかりました。つまり、親潮域の世界でもまれに見るほど豊かな水産資源は、アムール川が運ぶ鉄が支えている

可能性が出てきたのです。そこで我々は日本で発達してきた考えである「魚付林」を参考に、大陸と外洋を結ぶ巨大なシステムとして、アムール川流域とオホーツク海·親潮域のつながりを「巨大魚付林（きょだいうおつきりん）」と呼ぶことにしました。

ところで、なぜアムール川は大量の鉄をオホーツク海へと運ぶことができるのでしょうか。2005年と2006年、我々のプロジェクトでは中国とロシアの研究者の協力を得て、日本の５倍の面積をもつアムール川流域のどこから鉄が供給されるのか、広い大陸をしらみつぶしのように調べました。その結果、濃度の高い鉄はアムール川の中流域に存在する広大な湿原地域に源を持つことを突き止めました。

湿原は常時水に浸っていることから、還元的な環境にあり、そこでは鉄が水に溶け出します。広い湿原があれば、それだけ大量の鉄が水に溶け、アムール川によって運ばれることになります。一方で、アムール川流域に広がる湿原は、耕作可能な地域として、20世紀、とりわけ20世紀の後半において大規模に干拓が進められ、耕地や水田に転換されてきました。我々の調査によると、水田はまだしも、耕地になると鉄をほとんど供給しなくなることがわかりました。つまり、オホーツク海や親潮を支えている鉄は、アムール川流域における人間活動に密接に絡んでいることがわかったのです。

魚付林というひとつの閉じたシステムでは、上流の森の荒廃に対し、漁民自らが上流に出向き、植林を行うことで自分たちの生活の基盤である沿岸生態系を守るという試みが行われてきました。一方、アムール川流域とオホーツク海・親潮域をつなぐ巨大魚付林というシステムでは、魚付林同様、上流には林業・農業に依存する人々がおり、下流には水産業に依存する人々がいます。しかし、このシステムの中にはモンゴル、中国、ロシア、日本という国家が存在し、国境を越えて存在する人々の間には大変に細いつながりしかありません。魚付林で行われたように、漁業者がアムール川流域の土地利用に口を出すことは全く不可能な話です。

果たして巨大魚付林ではどのような物質循環が起こっているのか。人々はどのようにつながっているのか。そして巨大魚付林を保全し、上流と下流の生態系の未来可能性を保つにはどのような方策が考えうるのか。私たちのプロジェクトでは残された３年間を用いてこの課題に取り組んでいきたいと考えています。

写真／上―
筆者（アマゾンで）
写真／中―
三江平原での水田における鉄濃度の測定風景
写真／下―
アムール川河口における採水風景

v WF Ng

2

w

I R

I R W I E I

m F v WF Ng n

Ma

v WF Ng A O
R A
A l
A
u O v A
A
n A p
A
R
A
A
N y
A R l m
p A d

v WF Ng A
l
A s
A
l R l
w
A n
Al A
A A A
n 3 L A
s A
l R
b
l
Ak
AC A
l v
WF Ng AkC A kA A
E A A E 6 n
A n
d W

A6 n
n k d An
d n
A g
n A
kC A M s
S u A
u WJ
n v
kC A
E W A
A
e
A R e
A
l al o
i AACk n
A
l H R
A d
v A
s
C
A
N l
t dv F A
N w l S A i
As uk
t v WJ
t l A
d A
O
v
A M c L
Qi oc d
w S A
n A l

i i i
k AG NkM n CkA A u Rv D ILi E W
m E n ms A l om E an
mkC kC s n

第7回プロジェクト評価委員会により新しい研究プロジェクト決定

2月28日と29日に、2006年度の「研究プロジェクト評価委員会」が開かれました。今回の評価委員会は、終了プロジェクトの事後評価のほか、例年通りFS（フィージビリティ・スタディ）について本研究に移行することの可否を決める事前評価をおこないました。

今年度から、評価委員会に評価を付託する前に、所内で十分な議論をつくすことにしました。具体的には12月の「プロジェクト研究発表会」での全所的な議論を受けて、評価委員会に付託するかをあらかじめ連絡調整会議で決めることにしたのです。なお12月の時点では7本のFSのうち1本が自ら研究の中止を申し出られましたので、「研究発表会」ではこの1本を除く6本が所内での議論の対象となりました。結果、3本が評価委員会に付託されることになりました。

評価委員会では、種々議論の結果、この３本はそれぞれ注文をつけたうえで本研究に移行させるという評価結果を出しました（3本のプロジェクトを右に紹介します）。今年の評価委員会では例年になく厳しい注文もつき、それらはすべて文書にして3プロジェクトのリーダーに示されました。

なお今回の委員会を最後に、国外委員の5名、国内委員の3名の方が任期切れのため評価委員の職を辞されます。いずれも地球研をこよなく愛し、熱心に評価に当たってくださり、時には厳しく、また時には心温かい助言を頂きました。これら８名のかたがたに謝意を表したいと思います。（プログラム主幹　佐藤洋一郎）

2007年度本研究［プレリサーチ］紹介

人の生老病死と高所環境―3大「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応

高地における人間の生き方と自然および社会経済環境との関連を、世界の3大高地であるアンデス、ヒマラヤ・チベット、エチオピアで調査研究を行い比較することにより明らかにしていきます。3大高地住民の暮らしには農業や牧畜などの環境利用の方法において共通性が見られ、高度な精神性のある文明の誕生を可能にしてきました。高地文明という新しい仮説を提唱し、グローバリゼーションの影響とローカルな生活、生老病死の関係を調べながら、人―環境相互関係を検証します。身体に刻み込まれた環境という観点から、高所住民の疾病と老化の変容をさぐり、その背景となる生態系と社会の変化との関連を考察します。人が高所環境へ適応していったローカル・ノーレッジ（Local knowledge）とその限界の実態を検証しながら、人間と環境のあいだの関係を理解し、総合地球環境学の上に新たな視点を切り拓くことが本研究の目的です。グローバリゼーションに対する影響を評価し、高地文明の未来可能性を提言し、さらに、低地を中心に顕在化している近代文明の破綻ともいえる地球環境問題の解決へ向けて、高所からこそ示すことのできるモデルや知恵を提示することをめざします。（プロジェクト・リーダー　奥宮清人）

熱帯アジアにおける環境変化と感染症

熱帯アジアでは人口増加と経済発展にともない急激に自然環境が変化しています。森林減少、水田化、都市化が進み、そこで暮らす人々の生活も大きく変化しました。これらの環境変化と人々の生活様式の変化が、マラリアその他の感染症の増加や減少にあたえる影響を総合的、多面的に検証することが本研究の目的です。これまでの感染症研究は、西洋医科学biomedicineに基づき、発病メカニズムの解明や短期的対策を目的としていました。本研究は、

狭義の医学では重要視されてこなかった感染症研究における総合地球環境学的視点の確立をめざします。現在の医療過信・医療過剰は長期的解決策ではないはずです。本研究では反医学的になることなく医学も包括した新しいアプローチをめざします。そのためには気象や自然環境に関連する諸科学、社会科学、熱帯医学・生物学、疫学、人類学、人類生態学、地理学・歴史学を包括した総合的アプローチが重要だと考えています。（プロジェクト・リーダー　門司和彦）

人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生

現在、地球上のあらゆる生態系が人間活動の影響により縮小・劣化し、危機に瀕しています。生態系は単なる要素の集まりではなく、サブシステム内とサブシステム間に二重のネットワークをもつという視点から、崩壊のプロセスを明らかにします。このサブシステムには人間のネットワークも含まれます。そして、生態系利用に伴う長期的・広域的な生態系の劣化を最小化し、高い生物多様性と生態系サービスをもつ、健全で持続的な生態系の再生に向かう道筋をつけることを目的とします。調査地は、住民生活が生態系に依存しているがその崩壊が急激に起こっているモンゴル草原とサラワク熱帯林で、単なる地域研究でない一般化できる成果を得るために、あえて２カ所を選んでいます。調査地から得られたデータをもとに、土地利用の変化を基盤においたネットワークモデルを構築し、複数のシナリオのもとにモデルを走らせることによって政策選択の材料を提供するつもりです。（プロジェクト・リーダー　山村則男）

2007年度予備研究［フィージビリティ・スタディ］紹介

来年度の本研究候補として、今年度フィージビリティ・スタディに選ばれたプロジェクトは次のとおりです。

●東アジアの人間活動が大気環境に与える影響の解明と環境協調可能性の探究（リーダー：鄭　躍軍）

●伝統的農法の検証にもとづく未来型農業の提言（リーダー：佐藤雅志）

●移動と滞留、そして、都市の未来可能性（リーダー：村松　伸）

●カスピ海流域における産業活動、環境政策の変遷と生態系への影響（リーダー：北澤大輔）

●「人間の安全保障」としての子どもの未来可能性―アジアの環境問題と子ども―（リーダー：山内太郎）

●アラブ社会におけるサブシステンス生態系の研究―生活基盤回復のために―（リーダー：縄田浩志）

中国環境問題研究拠点 地球研と機構によって共同設置

地球研に中国環境問題研究拠点が設置される運びとなりました。人間文化研究機構が推進する現代中国地域研究推進事業の一環として、京都大学や慶應義塾大学、東京大学、早稲田大学、東洋文庫に設置される現代中国地域研究拠点のひとつとして、「中国の社会開発と環境保全」をテーマとする拠点として設置されるものです。本研究拠点は、中国における環境問題を自然・人間文化の両面にわたって総体的に捉えることを目的としています。

この拠点では、個々の地球研プロジェクトの研究成果を、標記テーマのもとに糾合して総合的に解析研究するとともに、その成果を発信します。また、その成果に立脚して今後の研究戦略を検討し、新たな地球研プロジェクトの立ち上げをもはかります。さらに、中国を含めた学術研究機関のネットワークを研究推進センターと協力しつつ構築し、統合的な視座を持つ若手研究者および民間人の育成を行うためのハブとして機能することを目指しています。

なお、拠点の事務局は当面第10研究室に設置し、本年度より活動を開始します。（中尾正義）

日髙所長退任記念講演会

総合地球環境学研究所を創設準備段階からリードしてきた日髙敏隆前所長の退任記念講演会が、3月30日(金)新·都ホテルで行われました。「この講演のテーマは『イマジネーション、イリュージョン、そして幽霊』」と意味深長に語り出して、聴衆の関心を惹き付け、次のような内容のエピソード満載の1時間となりました。

■

小学校時代は、身体が弱くて体操が苦手で、よく先生にいじめられた。学校をさぼっていつも昆虫観察をし、「どうしてなんだろう」という疑問にずっとこだわり続けた。さまざまな疑問は、大学に進学してすぐに解けるわけでもなく、既成概念にとらわれた教授たちからは仮説内容を馬鹿にされたりしたが、実験によって立証すると逆に「そう思っていたよ」と言われた。物理学の人たちからは、動物学なんて科学じゃないと言われ就職もなく、やっと就職した東京農工大では、農民の幸福に役に立たない学問はだめだなど言われた。しかし、「なぜ蝶は花にとまるのだろう」「なぜ蝶のオスは、メスがわかるのだろう」など、どうして？と思ったことにこだわり実験と観察を続けてきた。動物の行動は、いくつもの条件が重なって起きているため、物理の実験ほど単純ではないが、やっていれば必ずなんらかの答えが見つかる。ただ、その答え自体は絶対のものではなく、イリュージョンなのかもしれない。言い換えれば「いままでの説はイリュージョンだった」として、新しいイリュージョンを作り出す行為といえるかもしれない。科学は真理の追究であるという人もいるが、イリュージョンと思うほうが適切だろう。自分はそれを楽しんできたし、皆さんにも楽しんでいただきたい。

■

先生はいつもの調子で訥々と話されましたが、江戸落語の名人芸を聞いているような、2〜3分おきに笑いがおきる楽しい雰囲気の退任記念講演でした。日髙先生ご夫妻への花束贈呈なども行われました。(箕輪)

第17回地球研市民セミナー

平成18年度の最後の市民セミナーを3月9日に講演室にて開催しました。川端善一郎教授と奥宮清人助教授が「病気もいろいろ ― 人の医者、環境の医者」と題してそれぞれ話題を提供し、質疑応答がありました。市民セミナーでの複数の演者の例は少なく、生態学者と医師という組み合わせは初めてで、興味深いものでした。最後に、年度末に退職される日髙所長が「たくさんの方々に来ていただき、感謝もうしあげます。私も毎回、たのしく聞いてきました。これからもどうぞよろしく」と挨拶しました。

発表の趣旨は次のとおりです。

■

人体も自然環境も様々な物がつながった世界です。さらに人体と自然環境もつながっています。つながりが切れたときに病気が起きると考えられます。また人為的に作ったつながりが病気を起こすことも考えられます。病気の発生や拡大には人間活動が密接に関わっていると考えられます。これらの視点から、いくつかのつながりの中の病気を紹介します。

環境の医者は、自然環境におけるつながりを理解し、診断し、修復する人と言えるでしょう。人の医者は人体の中のつながりを理解し、診断し、治療する人と言えるでしょう。しかし、これからは環境の医者も人の医者も、人と自然環境とのつながりの中で起きる病気に注目することが重要だと思います。この視点に立った研究が地球研における私たちの研究課題です。そこで、川端が人間活動と環境改変と野生生物の病気との関連について、奥宮が人間活動と環境改変と人の病気との関連について、いくつかの考え方と事例を紹介し、皆さんと一緒に病気について考えてみたいと思います。

人事異動

［平成19年3月31日付け退職者］
野中健一（研究部助教授）→立教大学文学部教授へ
河本和明（研究部助手）→長崎大学環境科学部准教授へ
鼎信次郎（研究部助教授）→東京大学生産技術研究所准教授へ

［平成19年4月1日付け異動者］
森　隆（管理部財務課長）→愛媛大学財務部経理調達課長へ
松田充功（管理部研究協力課長）→大分大学研究・社会連携部長へ

南部眞一（管理部財務課長）←鳥羽商船高等専門学校会計課長より
川満信男（管理部研究協力課長）←山口大学学術研究部研究協力課長より

招へい外国人研究者

パキスタンのS.A.ラティフ大学考古学科准教授のマッラ（MALLAH, Qasid Hussain）さん（4月1日―9月30日、受入教員・長田教授）▼ロシア科学アカデミー極東支部研究員のミシーナ（MISHINA, Natalya）さん（4月28日―7月30日、白岩准教授）▼米国ミシガン大学地質科学研究科准教授のファン(HUANG, Shaopeng)さん（4月15日―7月15日、谷口准教授）▼ザンビア農業研究所次長のムワレ（MWALE, Moses）さん（4月1日―6月30日、梅津准教授）が、それぞれ研究されています。

■

出版物紹介1

地球研ライブラリー
『ヒマラヤと地球温暖化―消えゆく氷河』
中尾正義　編
2007年3月　昭和堂
2,415円

●

本書の口絵に、ヒマラヤの氷河のカラー写真が2枚ある。どちらも同じ氷河を写したものだが、1枚は1978年に、もう1枚は2004年に撮影されたものである。見比べると、氷河が極端に小さくなっていることが実感できる。

最近、アメリカのゴア元副大統領の「不都合な真実」という映画が巷で話題になっている。人類の生存をかけて地球温暖化問題と真摯に取り組まねばならないという趣旨の映画である。温暖化による氷河の縮小を印象付けるものとして、本書の口絵写真はその映画の中でも使われている。

地球研ライブラリーの1冊として出版された本書は、わが国の研究者によるヒマラヤの氷河研究の成果を以下のような内容でまとめたものである。

ヒマラヤでの温暖化が際立って急激ではないにもかかわらず氷河は世界で最も急速に小さくなっていること。それにはアジアモンスーンという特有の気候が大きな役割を果たしていること。また、氷河の縮小に、氷河に生きる生物の活動が効いていそうなこと。ヒマラヤに特に顕著な、表面を厚い堆積物で覆われた氷河も急速に縮小している実態とその理由、などである。

おりしも、地球温暖化はますます進行しているという趣旨のIPCCの第4次報告が出されたばかりで、タイムリーな出版となった。（中尾正義）

出版物紹介2

地球研ライブラリー
『人はなぜ花を愛でるのか』
日髙敏隆・白幡洋三郎　編
2007年3月　八坂書房　2,520円

●

「人はなぜ花を愛でるのか？」。もし、このような質問が投げかけられたとしたら、どのような返答ができるでしょうか。ほとんどの方は、答えに窮されるのではないでしょうか。

この問いそのものは、非常に素朴な疑問といえるでしょう。ただ、ひとたび正面から答えようとすれば、人文科学から自然科学までの人間や文化に関する幅広い知見を総合することが必要不可欠となるでしょう。このように考えると、「人はなぜ花を愛でるのか?」という問いは、人間文化の根源を問うものであり、また極めて学際的な研究統合を要するものになります。

本書は、この難解で深遠な問いに答えるべく、考古学・人類学・日本史・美術史・文化史などの専門家たちが、それぞれの視点から執筆した9編の論考を集録したものです。本書の前半5編は、人間は花といつ出会い、なぜ関係を結ぶようになったのか、という話題が中心に論じられています。また、後半4編は、人間が花をいかに扱い、どのように認識してきたか、という話題に焦点が当てられています。

いずれの論考も、「人はなぜ花を愛でるのか？」という問いとの格闘を通して、人間文化の根元に触れる問題が提起されています。花に思いを巡らすうちに、人間や文化のあり方を見つめ直している、そんな一冊です。（大西秀之）

第6回地球研フォーラム 地球環境問題としての「食」

地球研創設の翌年から年1回催している「地球研フォーラム」は、今年6回目を迎えます。7月7日(土)午後1時半ー5時、国立京都国際会館(京都市左京区宝ヶ池)で、「地球環境問題としての『食』」をテーマに催します。

私たちの日常生活から地球環境問題を考えるという視点から「食」を取り上げ、伏木亨·京大教授「人間にとってのおいしさ」、湯本貴和·地球研教授「日本人はなにを食べてきたか」、佐藤洋一郎·同「あなたの食卓はいま」、嘉田良平·放送大客員教授「農業·漁業の持続可能性を問う」から話題提供があり、4人をパネリストに秋道智彌·地球研副所長の司会で総合討論をおこないます。

入場無料。参加申込・問い合わせは、地球研・研究協力課フォーラム事務局(電話 075-707-2126／ファックス 075-707-2106／電子メール forum@chikyu.ac.jp)まで。

第2回国際シンポ 緑のアジア

地球研の研究プロジェクトの総合的な研究成果をもとに昨年11月に地球研第1回国際シンポジウム「水と人間生活」を開催しましたが、今年は「緑のアジア(Asian Green Belt)ーその過去、現在、未来」と題して10月29日(月)—31日(水)、JR京都駅前の「ぱるるプラザ」で予定しています。詳細は次号以降にお知らせします。

地球研叢書·地球研ライブラリー

地球研の研究や成果の意味を学問的にわかりやすく紹介する「地球研叢書」として昨年度は日髙敏隆・秋道智彌編『森はだれのものか？—アジアの森と人の未来』(昭和堂　2,415円)を刊行しました。また、今号の出版物紹介欄の『ヒマラヤと地球温暖化』と『人はなぜ花を愛でるのか』は、地球研が出版を支援する「地球研ライブラリー」と位置づけています。

上賀茂だより

地球研とは山ひとつ南側にある世界遺産・上賀茂神社の葵(あふひ)プロジェクトに、近隣の4小学校や市民とともに地球研も協力しています。境内にかつて群生し、葵祭の飾りにも使われるフタバアオイの株を増やして「葵の森」の復活をめざす活動です。4月13日に葵の株分け式が同神社であり、秋道副所長があいさつしました。まだ2年目ですが、楽しみです。(斎藤)

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所報［地球研ニュース］

Humanity & Nature Newsletter
No.8

［隔月刊］
ISSN 1880-8956

発行日
2007年6月1日

発行所
総合地球環境学研究所
〒603-8047
京都市北区上賀茂本山457番地の4
電話：075-707-2100［代表］
Eメール：newsletter@chikyu.ac.jp
URL：http://www.chikyu.ac.jp

発行
総合地球環境学研究所　広報委員会
委員長
湯本貴和

編集
総合地球環境学研究所　ニュースレター企画編集小委員会

協力
［株］シィー·ディー·アイ

デザイン
田中晋

本紙の内容は地球研のウェブサイトにも掲載しております.
郵送を希望されない方はお申し出ください.

表紙写真—
九州中央部の広大な草原は、毎年春の火入れによって維持されている
(九州班／大分県由布市)
［撮影:段上達雄］